

イースター、イエス様の復活というのは、「十字架の上で死んだイエス様が、もう一度生き返ってくださった」ということではありません。元のようになったのではなく、以前とは違う、新しい姿で生まれ変わって、私たちの所へ来てくださったのだ、ということです。

もう少し言いますと、イエス様が復活した、というのは、イエス様が聖霊になった、という風に考えるのが、わかりやすいように思えます。

今日の福音書は、復活された日の夕方と、八日後に弟子たちに現れたお話です。普通、聖霊が弟子たちに降ったのは、教会暦に従って、復活の7週後、50日過ぎた五旬祭の時だ。イエス様が天に昇られた10日後のことだと私たちは思っています。

しかし、このヨハネによる福音書では、復活の日の夕方、もう聖霊降臨が起こっている、と言っているのではないのでしょうか。

『20:21 イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」

20:22 そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。

20:23 だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。』

わたしたちは、五旬祭の日に、『やっと弟子たちは力を受けて、使徒となって世界中へ出て行って、福音を宣べ伝えるようになった、』と思っていますが、このヨハネによる福音書は、イエス様が天に昇ったり、50日も待って、炎のような聖霊を待っている必要はありません。復活した日に、イエス様が直接、息を弟子たちに吹きかけて、派遣しておられるのです。弟子たちは、もうイエス様の姿が見えなくても、喜んで福音を伝える者になった、ということだろうと思います。

ところが、ルカによる福音書とそれに続く使徒言行録は、聖霊が降ることまで、長い時間がかかったように書いています。そして、イエス様が、聖霊になって弟子たちを派遣したのに、まだまだ、イエス様の存在にもこだわって、スッキリしない表現が出てきます。

イエス様の復活から20年くらいして、外国人にキリスト教を伝えていたパウロが、2回目の伝道旅行をしていた時のことを、使徒言行録の著者ルカは、こんなふうに語っています。使徒言行録16章です。

『◆マケドニア人の幻

16:6 さて、彼らはアジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられたので、フリギア・ガラテヤ地方を通過して行った。

16:7 ミシア地方の近くまで行き、ビティニア州に入ろうとしたが、イエスの霊がそれを許さなかった。』

使徒たちを派遣して、彼らを動かしたものは、聖霊という、神様の息、風のようなものだ、と教会は教えてきましたが、聖書の中には、「イエスの霊」とか「キリストの霊」という表現が残っています。

そして、この箇所に出て来る「聖霊」と「イエスの霊」のことを、カトリックのフランシスコ会聖書では『「聖霊」は、「イエスの霊」(7節)と同じ意味である。』と注釈がついています。

イエス様が復活して、聖霊として働いておられる、と言ってもいいのではないのでしょうか。

たくさんの手紙を書いたパウロ自身も、ローマの信徒への手紙8章の中で、霊ということをいろんな表現で語っていますが、神の霊という言い方でも、このように語っています。

『8:14 神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。

8:15 あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。

8:16 この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒に証ししてください。

8:17 もし子供であれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。』

ここについての注解では、

『「アッバ」は、「父」という意味のアラム語で、父への信頼を表した子の呼びかけであり、キリストもゲツセマネの園で御父にこう呼びかけている(マルコ14:36)。パウロは15節b 16節で二つの内的な宗教体験を述べる。すなわち、一つは、われわれの霊が聖霊によって自発的に神を「父よ」と呼ぶこと、もう一つは、聖霊自身が、われわれのうちに宿る御子キリストの霊として同じく叫ぶことである(ガラテヤ4:6)。この二つの体験から、われわれは「神の子」の身分にあることを悟る。』

ですから、「イエスの霊」「キリストの霊」というのは、聖霊と同じように受け取っていいのです。

ガラテヤの信徒への手紙の中で、パウロは、聖霊の働きである霊の結ぶ実について具体的に説明しています。『5:22 これに対して、霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、5:23 柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません。5:24 キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです。5:25 わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。』

私たちの間に、『愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制』など、人々と仲良く暮らせるためのこれらのものがあるなら、それは復活したイエス様が、一緒に働いてくださっているからだ、と受け取ってもいいのではないのでしょうか。

イエス様の復活について、先週の福音書は、復活の日の朝、弟子たちが墓に行ってみると、イエス様の体がなかったことが語られていました。

この事を、科学的には、どのように説明するか、ということで、私たちは頭を抱えてしまうのですが、イエス様は時間にも空間にも支配されることなく、人々の中に入って力づける聖霊になられたのだ、と受け取るのが一番いいのではないかと私は思ったのです。

この聖霊になったイエス様は、今日の福音書に出て来るように、自由に鍵のかかった弟子たちのいる部屋にも入れるし、現代の私たちにも働きかけてくださっている。

そのことを喜べるのが、イースターを祝う私たちの内実だと思うのです。

私たちの間に、人々と一緒に生きることの喜びがあふれる時、それは聖霊の働きでしょうが、復活したイエス様の働きだ、ということをもっと素直に受け取れる者でありたいと思います